川が、さむい日のあめを流してゆく　岡野智火

貝がら捨ててある町の川の汐のひくひるまへ

きものすそに草の實ついてだまつてよりそうでゆく

ガラスのそとにある毎日ぬれてゐる秋　近木黎々火

枝にはなのともつたひくれまでをさな子負うた少年

海大きく出てゆく

小さな町に船が來た

月夜の山から水が流れてくる

風が、月は照つてゐる、影　池田詩外樓

道木の中出てぬれてゐる

ひげでも剃つてさて、うちにをる

朝月、月見草月よりも淡き

ひと雨やむと殘つてゐる日がごまのはな　吉澤稻市

汽車で戻つてまちがお盆水打つてあるこんばん

町として山を軒、或る日は粉する音障子しめてをる

柔の根本から明けでをり木の葉木にかぶさり　橋本夢道

ポートこいでもらつて居る女のかみの毛男こいでゐる

コスモスの家お友達遊びに來お友達歸る頃のコスモス

黄色な手まりのやうな柚子が生つて居りおんもでおんぶ

帰草がほんのり赤くなり實ごもつてゐる

なにげなく人は四方へ私も一方へ歸つてゆく

話、一生くそ面白くなかつたと一ぶく樂しゆ

ではここで別れて女の腕の正確な時間で歸る

卵は割らずに若くて未亡人となつたきれいな人

ふるい泥鰌やが生きてゐてどじようでござい

と語つたといふことだ。さうした自由律の作品としては――

弘安四年閏七月一日の朝の海

汝元來善人に付き徴死

小猫貰うて戻る懐のうごめき

莊嚴端麗の吉祥天女の御ン膳

此のうちの「吉祥天女」の句は、川柳詩の面目やくじよとしてゐる。追悼號の巻頭には、未亡人の句が出てゐる。これなぞは、自由律俳句にだいぶんに近いものと云へよう。剣花坊去つて後、新人もたくさん出てゐる。現今の傾向がどういふ風になつてゐるか、私はアサヒグラフなどで、時々目にふれる外は、よくは知らないけれども、川柳史といふものの上から見て剣花坊の功績は大きなものだつたに違ひあるまい。

×

このごろ、東京にも、京都にも、その他の地方にも句會がさかんになりつつある。名古屋はしばらく沈滞してゐたが、新に「平安の會」が活動をはじめた。八月廿二日に、名古屋松坂屋の平安殿に於て、五十名近い人が集つた。魚眠洞のアッセンによると、ころだ。その詠草の印刷物は一見したが、おほむね新人とおもはれる、其の句がなかなか面白かつた。

先生と京の町を祇園下河原水打つころ　木戸夢郎

提灯花の月夜は満月　小谷信夫

灰になつて濡れてゐる　林木衣樓

闕がせる者のないことがふとそんなこと、雜草をむしつてゐる　藤野番紅花

夏の雨くちなしの花を溢れてはれる　井上充夫

あさはあさ鳴ざるに買うて雨がはれま

客として白いざぶとんとうちはの桔梗の畫

饌が半分月夜になるきりぎりす

降りたらぬ雨が夾竹桃にはれて子供海へゆく

くれてまのない螢は紙につつんで子の手をひく

ゆふやけめづらかにもみぢには早くてきよみづでら夕ぞら

柿の木の雨はげしくなつて遠足から歸らない子供

訪ねて藪虱のついた合服の膝とてくづさしてもらふ

川の向うを通る人が柳にはもうはつ秋の月で

胡瓜をたべる青いはぎれがして背戸夜になつてゆく

去年は支那でその雪柳花やからかつて一枝

茶の木まるまると刈つてあるに新芽に雨

カレンダは七月の海の雲商談まとめようとする

蓮の中蓮がさいて顔を出してゐる朝日の中

河口につづく松の末けむるがほどに波のあがるか

くちなしの匂ふなどバケツで行水する

雨が涼しい石とそのまはり

おきぬけの空にかぼちや咲き虹が出てゆく

えんとつ一本その外はえんてんの畑にしてある

竹藪にさく草がひそかに織つてはゐる音

――と、こゝまで書いてふとところ／＼松の俳、再發足、第一回一といふ寄せ書が濱松から來たの集つたもの會三六郎他十名である。戰災には一ばんヒドクやられた濱松にして、此の復興ぶりはうれしいことである。

句會といふのは、しぜんに近所の者が集るのだから、地理的の制約をもつと共に、氣の合つた者が集るのだから、性格的の差異が出來る。それは當然である。で、ローカルに小さな會が澤山出來るのもよいし、氣の合つたものだけで、小さな研究的の集りを作つてゆくのもいい。ただ、それが己れの好むところに走りすぎて、排他的の氣分をかもし出すのは宜しくない。で、小さな會が時々は合同的に集つて、大きな道のありやうを確認しあふといふことが肝要である。又、句會といふものは、時に榮枯盛衰のあるのは止むをえないが、先づ、根をしつかりと張つておくことが肝要である。そうすれば、或時は落葉の冬を感じさせようとも、いつかは青々と茂る夏がまた來る。そうしたことを繰返しつつ生長してゆくものである。

錄會の句會は、俊二、白壁子等が一時に去つた爲に、にわかに淋しくなつたけれども、續けて開いてゐる。此頃は、私の家のすく上の祖屋をかりてゐる。きのふは、たい風來るといふ豫報で、荒れがまえの雨の降つてゐる日でもあり、會者は僅か數名だ

よのつねの見合とてけふ壺にくちなしの匂ひ白くてよし　堀英之助

娘の父でゐることもちよつと齒のぬけてゐることも句を思へば子を思へばくちなし匂つてゐる

屋根の上に海がある風景の風鈴に風がきてゐる　秋山秋紅蓼

むしろに梅干のあかさ暑さ身にしみてゐる

船具屋があつて此邊燒けてはゐないプラタンとびとびに夏

むつき乾す館ふせてあるなど客として青い山日のくれ（層雲社二句）

ひぐらしは、山鳩もまた鳴く空があつてわたしたち膳　大越晋亦紅

街は歩くと暑い日のこんな小さな鉄など買つて

茄子を描くとし白い皿一枚へ墨を落とし

蹤棚すずしい表から訪ねずつと奥へ這入り

唐きびの葉の細い夕月よ老後の影よ　船本月々虹

星のすずしい木々がこまかい葉をゆるがす

病妻今夜も月のいいのですずしくゐる

麥を干して庭先から山へつづく青葉

車にまゆを積みいりゆくまちの入口の橋

九時頃夜が涼しくなつてくる夏のともしび

かみなり岩手境にいつて鳴つてゐるすずしい

蚊が鳴いてくるふるさとの夜に父母はない

あめの日まどべでと圖書館にずつと本讀む

朝の葉影と日のひかり要用結び手紙にする

かみなりのこしていつた雫と雀子のこゑ

月夜のあかるい枝くらい枝のさくらがちる

みちばたのさくら昨日もちり今日もちり通る

はるを惜しむその十輪の花をえがく

つたが、句評をコクメイに話すには、却て少人數の方が行きとどくものである。此の日、東京から來た秋紅蓼と稻市とは「鎌倉の雨はしんみりとしていいですなア」などと云つてゐた。鎌倉禪居庵の座敷からは鎌倉アルプスの一部である勝上ヶ嶽が眺められる。庵からは淺茶の接待があつて、いかにも「半日の靜閑」といふ氣持であつた。

ことしの内に、東京に於て、關東層雲大會を開かうではないか、といふ案も起つてゐる。東京は、なにしろ、おほむね燒原であつて、適當な會場（ことに地方から上京する方の爲に宿泊の場所）を求めることが難しいのではあるが、郊外電車を用ひれば、然るべき候補地も二三、無いことはないので、多分十一月ごろには開會出來ようとおもふ。おつて、確定次第に、關東二圓の詩友には案内狀をさしあげるつもりである。

×

「雲の會」と「龍の會」といふ二つがあつて、ややこしいから、之を一つにするといふことは前に、別の印刷物を以て、双方の會員の方には通知したが、その會員以外の方のために、御話する。「雲の會」といふのは、「層雲」よりも廣く、俳句といふよりも、寧ろ一般の文化運動に關心をもつ方に呼びかけるものとして、「龍」といふリイフレットを配布する。會費は一時拂、百圓。會費受取證の代りに、小生の俳

きれいな空氣に日がさしてゐるそらまめの花
いつ通つても樂しいみちに野茨が咲いた　財馬呵歩
いけ垣のうちにお手玉とつて田舍のしげりゆく
今年梅を漬けようふるい小さな壺
三日月線路が伊勢へぬれてゐる
蓮の花馬場に馬せめてゐる　田中井夢
掃いても散る葉の風の犬ころ
風が菜畑にまだはたらく蟻がゐる
螢とぶ後添ひ貰ふ氣になつてゐる
朝早い電車で大阪城もう夏の日あびる
松に月が出ようとして雲、のすずしい石のみち（高台寺）
みどりこきてきてきみなさんそくさい（滴々亭）
横になつて青い山はなしてゐるはなし（詩外樓居）
天津の句のあなたで青葉に白い服あるいてゆかれる（虹子さん）
青葉ちょつと立話灯をつけた電車が通つてゐる
夜行のそとが青田明るくなるまちになる驛になる（丸亀）
家のよこまで植えてある田を朝二階で起きてゐる（用瀬）
ひざかりの電車がいつたりきたりする橋をはなれてゐる　池原魚眠洞
影もなんにもない石においといで汗ふく
蓮田の句ひひるねのさまの見えてゐる一軒二軒の前通る
日まわりいちにちの日のおとろえてゐる
月があつて十三夜頃川が川音して梅雨もあく頃
これがゆんべの川音の明けると釣つてゐる川音
遠く夏輕い雲を電車川の上に出て川風をゆく
夏、もう手につかまつてゐる

畫一點を進呈する。なほ、特典もあるが、詳しいことは、雲の會（神奈川縣大船町山ノ内一五三四）あて清規の請求をなされるといい。又、とりあへず會費を拂込まれる方は、振替口座横濱四八二五番、大雲社といふフリカヘを利用されたい。層雲社とは別々のものであるから　一しよにされないようにお願する。

關東層雲俳句大會

時　十一月三日（日曜明治節）午前十時より

所　國立博物館内「應擧館」
　　東京上野公園内

出句三句（出句、誰でも自由）

出席者に限らず、會費十圓を添えて（郵券にても可）十月二十日迄に「大會出句」と明記して、大泉園（神奈川縣大船町山之内一五三四）大會係宛お送り下さい

▲出句の際、大會に出席はつきりお示し下さい

▲大會々費二十圓（當日會場受付にて）

▲宿泊希望の方は出句と共にお書添え下さい

▲當日晝食御携行のこと

▲大會に不參の出句者には大會詠草を後日お送りします

清露抄

井泉水

月が沼のまん中秋になる　佐藤青美

たとへば沼を一枚のレンズとすると、そのレンズを通して、月の影が焦點をつくる、その焦點がすこしもボケルことがなく、はつきりと鮮かにピントを結んだ、それが沼のまんまん中であるといふことを見出した、その瞬間に「秋」を見出したのである。「月が水にうつてゐる」とか「月の影」とか云ふと、ありふれた風景であらうが、「月が……」と、その水の中に「月」そのものを見出した、宛も水の中から月が出てきたやうな、このおどろきがいきいきとしてゐて且つ自然である。「秋になる」といふ感じも、すなおにうなづかれる。空の色も澄み、水の色も澄み、月の色も澄んで、雲の一きれもなく、空氣はガラスのやうに透明であつて、ひえ〳〵としてい、夜がふけると、むしろつめたくほんとうに「秋」になつたと思はれる。

サアチライト風になびくがごとし秋はよし　近木黎々火

これは戦争中の句だが、すこしも戦争中らしい氣持がない。おもへば、戦争中だとても私達は、いつも肩をいからしてゐたわけではなく、時としては、戦争にしたがつておこる現象を一つの風景のやうに、靜かに觀察してゐたことがある。そのやうな「動亂」の中にある「靜寂」の氣持は、俳句の心境だと云つてよろしい。サアチライトの光芒が夜の空の一隅から大きな角度を取つて搖曳する、そのすばらしい仕掛は秋の夜の天の川のやうに美しい。それが遥景するだけ、天の川よりもきれいである。「空をつんざく」「空を切る」などと見る見方もあらう。又「旗をふる」やうな、と見るのも面白い一つの見方であらう。此の作者もこれを「旗」のやうに感じてゐる。しかも、應援の旗をふつて元氣をつけるやうに、景氣づけて見たのではない、その旗が風にふかれて自然となびいてゐるかのやうに見たのだ。アクチヴではなくて、パッシヴに——。ここに、うつくしい物をただうつくしとして眺めてゐる氣持がまさしく出てゐる。「風になびくがごとし」、この「ごとし」といふことばもいい。俳句では「ごとし」といふ説明風の助辭は、普通にはその句をとかく散文化して弱めるものだけれども、此の句にあつては反對に、作者の實感を卒直にうなづかせることばとなつてゐる「ごとし」といふことばに、おひかぶせて「秋はよし」と云つたことばが又、作者の實感を卒直に打ち出してゐる。それが重つたところに表現上の效果がある。「ごとし」「よし」の音感もたくまずして一種の調をととのへてゐる。

夕月が三日月なので包にしてにほふパン　藤崎麥村

此句そのものが焼きたてのパンのやうに、フックリとしたリズムをもつてゐる句である。「自然」と「生活」といふことは、よく俳句を說く上の題目となることだが、きわめて卑近なところに於て、大自然から受ける感しと、日々の食事の上の生活感情とがうつくしく溶けあつてゐる。この「三日月」が新鮮であるやうに、この感情もフレッシュであつて、こうした家庭の幸福さといふものが句つてゐる。新しく家庭をもつた若い奥さん——といふやうな人からが浮び出るやうだ。尤も作者は女性ではないが、麥村といふ人を知つてゐる

句には、この感情はやっぱり密村らしいと、思はせるのである。

掃きをはりて木槿のおちて三つさいてたくさん　高橋良太郎

昔、千利休がその師、紹鷗のもとで修行をしてゐた時、紹鷗が利休に露地の掃除をさせた。利休はていねいに掃き清めたが、まだ掃除の爲方が足りないと云はれた。重ねて掃いて水を打つた。だが、まだダメだと云はれた。そこで、利休は考へた。その露地に紅葉した木があつた、その木に手をかけてゆさぶつた。うつくしい紅葉が三つ四つ、掃き清めた上に落ちた。紹鷗は、それでよろしいと云つた——かういふ逸話がある。茶道の談としては面白い談だけれども、何か作りばなしのやうな不自然さもある。然し、この木槿の句は、まつたく自然の氣持でうつて、詩をもつてゐる人が、そこに落ちてゐる木槿の花を「おゝ又落ちて仕様がないねエ」——と思ふと共にその落ち花に美しさを見出した氣持が「おちて三つ」と「三つ」とかぞへたことばに打ち出されてゐる。そして、その上にさいてゐる木槿の木を見のがして、又うつくしいと見直した氣持が「さいてたくさん」といふことばに出てゐる。動作のはこびが氣持のはこびがそつくり言葉のはこびになつてゐる。こういふのを表現のリズムといふのである。

あをさがくれる頃つくれさつたスイッチョで夕はん　金井　三良

此の句の内容の書き方はいろ〳〵に出來ようけれども、まづ、一通りの書き方は、

青い空が暮れきると夕はんに灯したスイッチョ

といふ風な表現になるだらう。そこをもう一つ、たんねんに刻み込んで表はしたのが此の句である。「暮れるころ」「暮れきつた」とは、暮れ初めてから暮れきるまでの時間が出てゐる。パタリとつる〳〵おとしに暮れる日ではない。秋とは云へ、まだあたりは青一色なのだ。日がかげり初めると、その青さはかへつて一そう青々と身近に感じられてすゞしい。それもだん〳〵と暗くなつたので灯をともすといふことばは此の句の中にせないけれども「暮れきつた」といふ氣持から、そこにしぜんと一個の灯火が點出されたと見たい——戸外に向けてゐた目がおのづから室内にそそがれる。ちようど夕はんのお膳が並べられてゐる。その灯火に、いつしかスウイチョが來てゐるのだ。そのスウイチョの青いからだが「青さ」がくれきつた、その「青さ」のたましひのやうでもある。「スウイチョで夕はん」といふ表現もほゝゑましい。

雨ふるはさみもつて歩いてゐるかに　伊東　俊二

「かに」といふものが、よく書けてゐる。「はさみ」をもつてゐるからこそ「かに」ではあるが、その「はさみ」その物よりも、むしろ「もつて歩いてゐる」といふことばに、「かに」らしくかわいい、チョコマカとした動作がいき〳〵と感じられる。理屈で考へれば「はさみ」はかれの自體の一部であつて、決して手にもつてゐるのではないが、それを持つてゐるいてゐると見たところに、童謡的の世界が出てゐる。又「雨ふる」がよくきいてゐる。雨にぬれて、雨のふる中に、かれ、はさみを持ちまわつてゐるところがいい。甲羅のぬれた色もこれで出てゐる。水たまりをふんでヨチ〳〵とした足どりもこれで出てゐる。此の雨は、初秋の頃の涼しく、しかし幾分さびしい雨であると見たい。

一枚月旦

筒井莖吉

A 平松星童

この作家の詩のうからこんこんと溢れ出る鬼火のやうな詞藻に筆者は瞠目する。このぬめのやうな恭怨性は、層雲の過去に比類がないとも云へる。新に溢れ出る分過多症の兆候も無へないこともないがここまで秀抜な表現技巧をもてば、甘々や感傷の多少は氣にかからない。

ゆふやけがあをざめてゆくをランプのほやの金色のゆめ

雪の夜の時鈴をしてか　花のやうにともるまでの時間と空間

俳句の鬼裸木によつてわれわれは日本語の玄妙味をたんのうさせられ、麥村の巧緻な筆は日本語の美しさの限界を示したが、星童はこの巨匠の後繼者となる日を約束されてゐる。星童のチカチカした鋭さが沈んだ時期にこそ、一層の期待がある。その生得の才に甘へて、詩の破片を弄んだり、末梢感覺の遊戯に耽溺せぬやう、戒心したい。

うまやつゆけくてぎんがもうあきである

山に日のあるうち石の上ありのゆきさつきよとなる

筆者はかうした境地に靜かにゐる星童、奔端のやうな詩想に、いきなり身をまかせないで内省的な眼をした星童に好感をもつ、いつも新人にもう一歩ふみこんでと云ふ筆者も、もう一歩退いてと云ふのは星童の場合である。

B 里井正子

このごろの女流作家の沈滯のさなかへ、クローズアップされた新人である。層雲はかつて、伊藤みどり、井上牧子、塚田虹子のすぐれた閨秀作家をもつた。特に牧子の異色ある作風は層雲の珠玉的存在でもあつた。當日本女性の生活感情を縦横に詠つた牧子の筆は、寸鐵的に筆者の感銘を叩いたものであつた。

うす陽のさしたやうな産後とてすはつてゐる　矢内花子

かつて層雲の一隅に載つたこの印象的な句が、十年以上を經ても筆者の記憶を去らない。この句の主題が女性だけのものと云ふよりこのセンスとセンチメントこそ女性獨自のものであり、この感覺の秘庫は女性にのみ開かれるものである。かつて女性が詠ひ、その後苦々しくも數々の模倣を生んだ「どこかに月のありさうな……」と云ふ感覺的表現は、女性的な、しかも女性的な獨特の詩的感情であつて、その時、その人唯一のインスピレーションにほかならない。誰が使つても何べん使つても文句のない季題趣味とはちがふのである。正子の句調の柔軟性と情緒はまぎれもなく女性的である。

彼女こそあまりに層雲的な常套手法に練達することに汲々して自己抹殺のあやまりを置すことなく、正確に進むべき道を知つてゐる。

洗ひあげてちやわんのゐがぬれてゐる夜が雪つむ上のあめ

あき口の陽がちよつと色ついた水みづにさしてある匙

これは女性だけが呼吸する感覺世界である。この新人のすぐれた資質は與へられた武器をいみじくも驅使してあますところない。

C 北田千秋子

そのかみ、アパートの窓から塔の山の星夜に郷愁を詠つた物いはぬこの少年は、いつかその甘すつぱい泪をふりはらつて、哲學的な風格を帶びはじめて來た。模倣を嫌ふ千秋子は、ひとり高踏的な道を辿つてゆく、けいきよくに踏みいればいるほど彼の個性は星のやうにかがやく。

櫻に間に合ひし事云ひ余の事云はず

燒・跡 燒け殘りつばきに椿さきてをる

燒 跡 麥 畑 となりしがけふの春さめ

この一連に吾亦紅の匂ひを感ずるのは筆者の主情性か、吾亦紅もまた層雲高踏派の一人である。千秋子につよく發散する手織木綿の風趣は彼の研さんではなくアプリオリである。

弟の心の中を知つてをり弟と芹をつみてゐ

千秋子はよき弟をもち、星童、宵火のよき俳友をもつ、星童、宵火のせん細味に千秋子が、千秋子の藜宕に前者が影響されることはよきべんきようである。

D 飯尾青城子

青城子の健實味は詩外樓と層雲の双璧であらう。めんめんとして測れない詩藻をかちつづけるのもこの二人であらう。句が魚眠洞にとつて宗教客體とするなら、青城子詩外樓にとつては精神的な糧といつてもいい。魚眠洞が火になつて句と取組んでゐるとするなら、二人は眼を細めて句を愛撫してやまない。

蕗のたうが出ましたよおばあさん此のうちの古い時計がボンボンボン

なんと斯んな世の中となつて貓さん屋根べこんべこんさ

句に情熱を失ひそんな意味での不感症になつた最近の筆者にこれほど劇しくアッピールした句はない。青城子の素朴な太い指と、秀でた額がほうふつする。これは稻市の領域だと云つた人がゐるが、稻市の風格と青城子のそれを長律の外貌のいちべつでいつしよにするのは早計であらう。青城子の洒脫味は青城子のもので、稻市の飄逸的にみへてどこかに神經質な眼と、都會的メランコリアを感ずる句と同一軌上に置くのは皮相觀である。

雪よりも白い一羽となつて雪晴れたそら

「青城子の半面の完べき性であり、俳句的悟淫の一面である。

雪やみし雪の落日裸木

と、乙にすました短律時代の裸木をふりかへつてみて、筆者はいろいろな意味での隱世感にうたれる。十二、三年前の麻が俳談にこの句をさん嘆した巴水樓は、いまこの最高度の自由律の完成をみてどう云ふだらうか。

ま こ と

大山澄太

「西行の和歌に於ける、雪舟の繪に於ける、利休の茶に於ける、通ふものは一つなり」

とは芭蕉のことばであるが、その一つとは、何をいふのであらうかと、わたくしは久しい間考へて來たかと思ふ。われわれから言へば、この言葉に「芭蕉の俳句に於ける」をつけ加へて、通ふものは一つなりと結びたい氣がするのであるが、さてその一つとは何であ

か、それを明かにしておかなくては、芭蕉の俳句を之に加へることは出來ない。

わたくしは考へた。三年、五年考へた。なか〳〵解らぬので、考へることを忘れてまた思ひ出しては、七年、十年、十五年は空しく經つてしまつた。「さび」であるかとも思ひ、「風雅」ではあるまいかとも思つてみた。またある時は「自然」といふ風にも味つてみた。しかしそのいづれも、しつくりしないままで、どうやら芭蕉が死んで行つた筈にもあまり遠くない此の頃になつて、それは「まこと」であるといふ風にだん〳〵自分の心が定つて來たのである。

少くとも芭蕉ほどの人であるならば、歌や樂や繪を貴くものは、藝術の世界だけに通ふものとは限らないであらう。日本の藝道は、その掘下げたところに於ては、世間のあらゆる道と、一つにつながるものでなくてはなるまい。わたくしははじめ、芭蕉を尊ぶる道と松陰を探る道は別のものであるかと思つてゐた。雪舟を慕ふ心と、尊德を求むる道は、まるで違つたもののように思つてゐた。しかし此の世の旅をつづけてゐるうちに、それらの道は、皆ひとつのまことによつて、しつかりと日本の國土の地下に於て、溶け合つてゐることに氣づくようになつたのである。

「そのひとつ誠の種より、言の葉の花實は出でくるにて、花となり、實となり、色となり香となりて、さまざまのあやをなすも、もとひとつの誠の根ざしより出できたるなり。その根ざしの誠をよそにして、花實色香のみにはしるを、まことなき歌といふなり。」

さういふ橘曙覽は「いつはりのたくみをいふな誠だに、さぐれば歌はやすからむもの」と歌つてゐる。

掘下げて、掘りあてたまことを根として、そこからかるく、淡々と、或る人は歌ひ、或る人は畫き、またある人は茶を點ずるのであつた。かうした樣のつながりに於て、もののまことを感得した芭蕉の觀方に對して、「幻住庵の記」などは、自分の一生を堅い主觀的に一筋に貫く態度を物語つてゐると見ることは出來ないものであらうか。

「つら〳〵年月の移りこし、拙き身のしろを思ふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛縫祖窠の扉に入らむとせしもたよりなき風雲に身をまめ、花馬に情を勞して、しばらく生涯の計とさへなれば。終に無能無才にしてこの一筋につながる。」

これは單なる立身出世の否定ではない、また單なる佛道修行の否定でもない。さういふ努力と、花馬風月への努力との間に、一連のつながり、まことへの思慕と追求とがこめられてゐたことを思はねばならない。だからこそその終局の悟りとして、無能無才の自覺が現成したのである。

横にあらゆるものと一つに通ふところのものと、堅にいろ〳〵のものを貫いて一筋につながるところのものと、此の二つのものの出會ふところに芭蕉のまことを見出したいと思ふのである。

今までの日本の文學は、堅につながる傳統の線に副うて、生きて來たかと思ふ。そのいのちが、まことのものであるとするならば、やがてそれは、歐米の横につながる一切のものと、何處かの一點に於て、通ふところのものでなくてはなるまい。芭蕉のように、日本と支那以外の國の文化に觸れ得なかつた時代の人のまことを、あらゆる國の文化につながらせようとするところにも、われ〳〵の新しい努力がいるのではあるまいか。

かくて、ひたぶるにまことを探ることも俳道の修行である。しかもそのまことさへも忘れ捨てて、この道に遊ぶ人は、更にいよく深く芭蕉のいう「一つなり」に生くる人であらう。

飯ばかりのめし

内島北朗

日本人の云ふものはどうしてこうも、白いお米のめしに、しろじやくがあるものか、最近ジャガタラの薯ばかり食つて居ると、いよいよしみじみ、お米のめしが懐しくなる。それにつけても、死んだ山頭火の句を偲んで、うらやましくなるわけである。

しみじみ食べる飯ばかりの飯である

飯ばかりの飯とは、今の我身に比して、山頭火は随分ぜいたく坊主であつたと云ひたいところだ。うちの子供曰く、白いめしばかりのめしなら、何んにもおかずがなくてもけつこうだと、つぶやく。當時山頭火のめしばかりのめしは、最も簡素な行乞生活を語るものであつたにちがひないが、今昔の感にたえない。隣屋の主人公は、やせた體を、なげ出して苦笑を禁じえないのである。

南瓜の葉かげに、キリギリスが鳴く、涼風が蓋瓶の足の裏を吹く

離れかの句に足のうらが涼しい、と云ふ名句があつたと思ふが思ひ浮ばない。放哉の句に

足のうち洗へば白くなる

と云ふのがあつた、當時先生と私がこの句を見て、放哉らしい思切つた句であると語合つたことであつた。全く今考えて見ても、さう佳い句だとは思はれない。

然し昨日遠平島にやつている邪かに、昔の日の思い出した所に敬意を表さねばならない。この句の主人公は私もよく知つてゐる、小豆島南郷庵うらの漁師の子供であつた。子供は常に洗足で道を歩く、たまたま彼れ南郷庵へ上がらうとする時、放哉自ら雑巾を持つて子供の黒い足の裏を洗つてやる。こんな黒い足でも洗へば白くなる、それを句にとり立てたことは偉い。

元來放哉は死んでから、持上げられて偉くなつた形だが、即ち再吟味せられて彼れが光り始めたと云はねばならない、佛ともなればありがたいものだ。

生きて居る間の放哉は四方八方相當にやつかい者であつたにちがいない。

足と云へば、彼れが金の足を出して、當時放哉後援の會員をやつてゐた私に、出た足を何とかしてくれと云つてよこした事がある。それは南郷庵の向の石屋に墓石の字を書いてやつた、その謝礼に酒を一升もらつた、それがそもそも足の出る種であつた、お祭の日に村のばあさん達、即ちご詠歌の連中と一ぱい呑んだ、メートルが上つたと同時に足が出たと云ふのであつた。

此頃のインフレ生活では、誰れもかれも、足の出ないものはないであらう、放哉のやうに足のうら洗へば白くなる。などと涼しい顔もして居られない。今日も女房曰く、ゆかた一枚が千二百五十圓也と、悲鳴をあげる。昔ならば、宿のゆかたを、ひつかけて、逃げの一策でございとしやれて見ても、遽つて面白がられた位いのものであつた。再び山頭火をもち出すが、

酔うてこほろぎと寝ていたよ

こんなけつこうな、御身分の人は當世一人も居ないであらう。

明月壇

正直なこころはだかでくらせばあさをなく　平野草介

宵の青い葉ともう暮れる日が水底にある石

風鈴、すずしいのですすんでゐる

軒に虫かごをあついのでうちにゐる

新聞には天子様野球見物僕達ラヂオけふすずしい

畑道の小石も今日の好いあめ

一ン日暑い空が星を出した川の川音　池沼星兒

畑をうち終つてほんとうに秋は夕暮れです

ききようの五瓣正しく朝の日さしそむる

すつかり青葉ゆでたまごくるりとむく

ひまはり白服の生徒達ちらばらに出てくる

湖に星が出て星をちらして潜いでゆく

うみなり高い日の南瓜の花がいつまでも咲いて　石川舟洋

山が青くて暮れてくるわいいなごは青い稲に

いらかふりだしてゐるはつば

はしごならいつものとこに置いてあるよい月が出てゐる

かごに草がいつぱいになるお天道様が大きくあがつてくる

青いいちじく父のゐないこどもいつか子をもつてゐる私で

みづにみづぐるまの冬となるかげ

南瓜いくつかなつてゐるとしよりにあついこと云ふてゐる

かんさんな椅子でストローで水沈めてみたり待つてゐる　淺野保樂

少女の白いエプロンにぶどうかごのぶどうがこぼれる

もくせいちるころなくなつたきみのこどものじやのめなかりる

月光はまべですいか食べてゐる　横瀬青山子

くもがうみにのまれてしまひあれが一つゐる

虫おくりの鉦やたいこやたいまつのほのほや三日月

杉山かけひの音味噌すつて居る　桐井あしひこ

杉山我をつつめりゆあみする

くるまのあと下駄のあと雨のあと同行二人

納屋にすむことにして雪靴がかけてある

風が白う山へ行く道かわいてくる　中西國友

ひるむし、公園こども達ひるめしひらく

朝ざむ水くむとこやさんにもみちしてゐる

手をのべればぐみのすたすたと行く

冬菜あらうたるながれに冬菜のしたたり

豆がもちあげたおしめりかげん　遠藤源治

ひとりだけのきゆうすのぶた

みちがだんだんと暗くなるたばこのはつば

白粉はげてしまふ顔が汗かいてまだ出つてゐる

いゆるとなると高いそら雲が通つてゆく

ぎんが、かぜのあふれる草のなかにないてゐる

草が穂になる月の出のかぜになる

ひぐらし、ようやく日のしづみたり

ひぐらし、よわいからだと思ふまいとおもふ

働けるからだとなり麥の芽のひかり

洪水ひいた夕べむくげの白さ目にしむ（雄物川洪水四句）　福岡やゑ子

馬の食む草とてもない既の今日も雨ふる　吉村しをり

泥のなかから咲いて豆の花むらさきな　下總磁郎

ひぐらしの聲も洪水すぎた家とで田畑とて　倉本勤也

しよせんはなるようにしかならない豆の皮をむく　石井洋音

つけゆく籠にきうりもぎて朝ぎりの山へはれかかる　齋藤第九人

冬の野の黄色な花の感情　加藤白水境

すいもの野ばらの赤い實の甘ずっぱいのもつむ身ではなり　樋口草山

少女達オルガン練習終えて青桐の下に見えて通る　梅田幸延

こゝ家こどもなくてまいあさ落葉をはく　岡本流一

海へつづく松林の中療養所があらあめ　木滑洋子

川を合はせて行く川の水かさ東北一帶はあめ　梅木成敏

着いて日ぐれまへの温泉宿の手すり　竹久清信

天の川、子供と話がつきない　内藤英夫

昨日ふつて今日ふつて雪の草屋根　加藤六六子

炎暑、童女白い眼帶して通る

ゆうぐれさざなみよせるばかりの白砂をあるく

みそ、さざい覓の水がきてゐる窓に

ほたる、湯あがりのてすりにかける

伐木丁々あたりもいろづきそめてゐる

朝の涼しさが一本の木である

橋のむこうは月のでるような海になつてゐる

乞食が水の上には星がうつつてゐる

ひまわりの花の時間を蟻が忙がしい

雲のかたち夏クレーンがかるがる吊りさげてゐる

風が吹くから雲がながれることもたち

からをぬげばなくせみの桑の葉

みちが霧のなか歩いて山の霧はれてくる

窓あけてついついつばめカーテンの風

白いつめたい貝がらをひとつ朝

うちの子によその子がきて花火わたしがつけてゐる

こんなところで別れて後姿が遠が直線

着いて顔を洗つて山の夕もや田舎

道の白い埃り盆である氷屋の旗

いちじく熟れるころのつゆけき地藏さま

貝のような月があつて海鳴りしてゐる

電線にかかり三日月街がしづかになつてゐる

雪の不流れたり草の上流れたり春になる

貧しくくらしてすすむしまつむし

かいさつ終つたなんとしづかな待合室の時計で

ひさしぶりの星がでてから月夜になる水田の水

あすも日和の夕日を入れてゐる山でかなかな

暑い時は暑いがよろしい鍬は洗つてしづく

夜も稻こいで山は月しろの松の木一本

灯が風のやんでゐるあめ

木がしづくするあめのあと蟬なくすだれのうち

椿のはなしづかな雨になつて灯をともしてゐる

はだしに夏の土の水のながれてゆく

したたるような夕燒雲のトマトをもぎとる

北風からたちのとげとげである

改札口出るとみかんうつてゐる雪の富士見える　鈴木單衣女

あなたのうちの白いコスモスそのあたりの紅いコスモスにあるく

藪は藪柑子に日のさして遠くの手まり歌　水田葦史郎

山の池には雪もあつて熊笹風吹いてゐる

このごろ月が寒には暗い山に山の連り　永田杏平

空から一本の線が、太陽に風のある

閃光、葉と葉と驟雨にまかせきつてゐる

こんなに甘い蜜れであり馬車の栗色の馬であり眩い丘の冬木であり

藪に葉風もない一枝もすがけんこうこした姿勢である　飯野無花果

見えなくなるまで見てゐる道の草

日があつて雲のある空麥の穂

にごつてゐてしきりに草がながれてくる　池邊象外子

一日カアテンにある風をその刻を秒針（友の死）

からかさほして紙屋さんの前の河原日がのびてる　三好茶丘

夏朝　夏山曲曳日新聞はいたつ

山寺で和尚さんおひとりでかぼちやの花　田中無絃

蟬が土から出る木の下に椅子がある

砂のあしあと月が出てくる　岡崎雪炎

蓼たばねてたばねて並べて日暮れる

木の陰の草青くひつそりと子は遊び　梁田千可志

その事雖もふれないで胡瓜漬ばりばり食ぶる

風がトンネル吹きぬけてゐる山の空天の川

黒い木立に風があるあかるい窓に子供が寝てゐる

黒い山のかたち火の粉ふきあげて汽車が停つてゐる

子供のまつりのたいこがなる風は山からふく

もう冬至がきてゐる雪山夕日　小泉鬼魂郎

こんばん蚊がひどい手紙の添書する

盆提灯少しゆれる風が今夜はある　森田和夫

春寒く悪いからすも鳴かずに逝かれた

紅い蓮白いはちすわいてゐる水　鍋島次男

越してきたばかりのちやぶだいの脚をたてる

鐵橋へ汽車、裸の子が河原をかけて來る　長谷川善一

月が田の面にうつり私と子供とゐる

三角のわらやねはお寺さんで青たんぼ　日野素木

冬が晴れて川からは町となる橋を渡り

水ながれをりあやめ咲きをり一本を切る　中村未知男

古ぼけた煙草の看板と柿の花べたべた落ちてゐる

兵の頃のこども、久々な君と庭のトマトの花すずしい　中野弘雄

まいあさ朝顔大きくさいてきちんとした部屋

月夜の花ねむられず夢んでゐる　吉原三峽水

秋の花がさしてある朝の、黒板

冬がくれば來るで川が流れてゐる家の裏

ぽつかり西瓜の花の大きくて朝から裸　永井郎南

ひでりつづきの日がのぼると水門のかげ

お好きであつた花である冷い水をそそぎまゐらす　森田松枝

配給の酒を夜のしづかな牧水の酒の歌である

夏うぐひすのないて明けてきた山のかたち　安達俊郎

プラタナスの葉が朝が美しい赤十字病院の通り

水まいて土のいろくれてあぢさいのいろ

ちぶさそつとはなしてかやのいろのゆかたでゐる

ポプラ風にヒラヒラと青田の實の良いらしく
くれて景色がふくろがをちこち
くれると灯がうつる音たてながれる
煙を吐かない煙突が太くて炎天
すみなれて柿があをい實になる
蓮のにほひの月夜そこまで送つてゆく
よくよくのよくよくのびんぼうに生れかなかなかな
命あればこそ細い蚊の御見てゐる
木いちご赤い實雨はれて子どもたち
きりふかし山道牛についてくる
今年はお併へが出來る鬼灯に雨、秋立つ
淡雪といふぞうりを上げておきましたといふ
日まわりつゆけくかがんで朝の煙草にする
開襟シャツにも風は涼らしく山が遠くて
夏はプラタナスの影三角くおを寄る
土に落ちてゐて木の實朝はぬれてゐる
青葉の中のふんすいがくれてゐる
なすび苗もちつてもどつて島の一うね
草山、日のおちたあとの雲がいつぱいに動いてゐる
つばめきてゐるそかいゐるとにバラック建てゐる
春のようなまぶしさへ抱いて出る
木せいは十字のこまかな花つけて、匂うてくる
土が熱く麥の芽も正月
夕日しみじみと山が今年も終りの日の入る時
鏡に夏帽などかぶつてみたり退院近し

山口草露
松林朝陽子
鵜飼正治
瀬川英晋
石川青花子
矢島川せみ
梁瀬阿羅與
平位阿木
竹澤しげる
丸山ゆうじ
三好米子
水野田夜詩
山中勉

臥してゐるほかない身の窓は靜かに梅雨ふるはかり
子を背負つて野菜をさげて月夜になる
馬が二頭思ひのまま草食つてゐる大きな夕日
佛をうづめてしまうとこわれたお膳のふた
引越してきたままの月夜
夕焼けの草をひいてお盆の墓にする
雷が焼いた家のそばの柿の木で
橋を渡ると私の村赤いとんぼとんでゐる
ふるさと井戸水がつめたいやら赤とんぼとんでゐるやら
小徑が谷へ下りる木の實落ちてゐる
午後の人出を秋の日遺骨胸にかけて通る
蛙の澤がくれてくる濤手をつないで渡る
たんぼぼ一握りもち少年どこまでも青空
廣間の襖がまんかいで式には間のある運動である
櫻さく歩ける樣になつて歩かせてゆく
疲れてついて山のひえびえひぐらし
まひる雲もなくあぢさいは大きな花
きうりやなすやトマトやおまつり夕日
炎天のペンキ屋さんひまわりの花咲いてゐる
うちの島でなつた茄子と桔梗の花と鬼灯盆くる
やぐらの上で太鼓をうつて普頭とつて温夜の屋
何もかもすぎさつたことのから松ぶいてきた
道が若葉して林の中へふかれてゆく
木のかげ大きな木の下裸で洗濯してゐる
汗を腕で拭うては蟬が鳴いてゐる

野口光
仁平青蛾城
尾佐六
北浦信三郎
手塚云水
明石青露子
飯田三砂
北爪やよひ
栃本啟男
植野香林洞
五十嵐みい
萩原肇

トラックの助手がはだかで雨がどしやぶり
幼くねむり月がガラスの眞中
春の山見通しに戰死復員の測量ってゐる
學校へは母と手を連れて梅も咲きそうな
逢りかえで水にうるい溜の影がまひる眞夏
大きな牛がゐて畦の半銅ひ朝の青草
雨の日まりついてゐて屋根が青い雨
ぶらんこ、明をすく人が田にゐる
夕燒小燒でいもさしてる校庭からすもきてゐる
まろい月でてさなぼりはあもにかふいてゐる
林の一ところ木を伐つて空が雲つてゐる
ひさびさの客です戸棚から火鉢出される
おほかた植えてしまつた田の色風ふく夕べ
刈る人運ぶ人ことしの夢の出來架けてゐる人
林の中ランプをつけて林が月夜
雪山の火星がまわる二三軒部落
姉のえりもとなどなほし秋晴れに見送る
背中にゆさゆさ國子をつけて麥の香はこぶ
おばあさんとたつに日がとどき雀ないてゐる
月が明るうて橋のあたりがしづかな春
風が涼しいほどな妻が瓜をきざむ音で
すすけた土間の綜呂竹おきかへたりして正月になる
みちの時計屋にお客が一人灯が秋となつてゐる
山のむこうに山のおく見えてこゑ〳〵秋の収入最中
ここから會津へ近道林の葉ひろくしげり

永井朗圃人
佐藤吟雨
佐藤コト
花輪紫川
岸田谷川水
増山田比良
尾畑豊舟人
寺田夷平
田中冴子
酒井健之
櫻井紫村
杉本伊之助
小澤法雄

はと、ぼくがいしゆみもつてゐるのをしつてゐる
ろーま字で書いてあつたり七夕の色紙たんざく竹青く
すべては水の如くに煙草しきりに吸つてゐる
トマトいくつももいできて母老ひたまひし
そんな思ひ出もサボテンの花が夕べ
石を投げ石を投げ海の涯雲のわく
部屋がくらくなつて夕立する机の上の本
砂の小みちが海へ行くみちかにがでてゐる
村の灯が見えたりかくれたりして青田の中の線路
子ども輪になつてお稻荷樣の赤い鳥居くれてくる
白菊に梅もどきもさして霜月になる
リュックのいたみつくろう妻がそこが涼しい縁に坐り
燒場がけふは子を燒いてかつこうかつこうないてゐる
鬼が百まで數える隱れてしまつた夕空がある
心さびしくてごまの花白くて夕ぐれる
炎天のテントに風がくる石鹸ありますます瓜あります
木蓮咲いてあせて公園今日も夜がきて
朝出て夕べもどつて宿のてすりで一ぷく
風吹きくるちよつと枯枝動かないときも夕空
蛾が白いはねで風に
障子きつちり閉めて湯の音と川の音と話がある
鷺であろうかひろびろ青田汽車で涼しく
灯を消してから月の明るい少し風のある
雀おりてゐてふりやんだばかり子供の聲
祭の太鼓が聞えてくる小川で高下駄洗つてゐる

近藤ひろし
丸田治子
大町桃水
寺田山茶子
増田田比夫
高橋幽亭
中谷美保子
多賀能千里
安形すず子
山内小糸
吉川群孤
鈴木作良
西本イチ
鈴木敬三
青山さだ子
山内俊子
前田一塔
平松哲司
橋本光男
近藤としを
青木丘草
阿部シゲ
井上英子
大橋乙美
太田節子

いひすぎたなとおもふかぜなどふいてゐる
南瓜の花咲きそろうたまぶしい程の朝になる
蝶のようなハンカチが見えなくなるまで先生さようなら
秋の日ひえを抜きあるにじばらく憩ひをる
しぐんし咲いてわらんべよはだしでさんごしようで
とんぼがついてきたりする私が歩いて君の家へゆく
風がわくらばひとひらふたひら日がくれる
土手のさくらさくペタルかろくゆく
校舎が焼けた校庭の禁さくらその下道る
風つよく山櫻一本さいてゐた
ストのビラがべたべた貼つてある門を出て大きな夕日で
ひつぎのいつたそりのあとが夕日の雪道
遠いくにから鮪賣りにきてゐて寒雨
すらりと伸びて竹になつてゐる
柿の花落ちてゐる拾えば珠數になる
コップの水の冷たくてすぐ汗になつてしまふ
つばめの子がにぎやかに顔出して雨がやんだ空
夕燒川にうつり私は歸るのです
はがきでまめだというてきたあつい日で
山燒くけむり山はしつかにくるばかり
ねぎに花が咲いた朝早く隣の奥さん
別れてからの道がまつ暗天の川原
話が切れて月夜砂に字を書いてゐる
からすこどもたち風が吹く
山の松に風川の橋に風わたつていく

前田睦夫
村越庄吉
山内康子
鈴木梅宇人
海堀鬼昭
湯淺影外子
梅路紗智子
白澤道子
佐藤緑雨
佐竹久枝
櫻井白朗
澤田惠子
菅原西人
歸見金剛
井上京治
渡邊金俊
秋山和三
坂野正德
杉本白舟
白崎子羊
頼國棗石
高田山水
鈴木昇
椿千世
村田菊三

海へ道がまつすぐ風が秋になつてゐる
鐵橋汽車が通るときあからあから夕日してゐる
半枚の新聞をもち落葉して道つとめにゆく
豆をむきひたすらに豆になつてゐる夕日の中
人がだまつて風が吹いてゐる橋
小鳥の胸にさす夕日の陰子あけてある
毎朝通り池があつて空がある
その風景の稻が刈られてゆくのをとんでゆく
じぶんの家のやねの星が流れる秋になる
おまつりすんだらくがきをして遊んでゐる
さるすべりの花毎日あかく夕日には戻つてゐる鳩
さるすべりの花の午後になつた學校のオルガン
秋夜亡き人を思ふとき出がきて長い觸角
夏公園の草のまばらな涙です
小さな箱にリボンがたまりますミシンふみます
青葉が青くもらつた名刺の裏
吸えば鏡にもたばこの赤い火ひとり
春が時計のふりこがゆつくり小使さん鈴ふる時刻になる
提灯つけて歩く園い灯の春夜が山
ポストがあつて旅籠があつていつか先生も來た暑い道（遠江川崎）
それから瓦工場が出來製鹽所が出來暑い海になつてゐる
内からと外からとガラスみがいて秋が戰爭がない空で
松の木が見てゐる道がとうとうくれてしまつた春
こんなところから通學する春になつてゐる
ライン白く暑く攻める守る交代

高井のぼる
前山美代
南虚白
西野外夫
高田松江
西村ひろを
岡本星池
近藤紫州
北村文一
小澤白楓
久保眞弓
寺島村一
吉見青文
小林樺子
山本綾子
伊東俊二

東海層雲俳句大會（名古屋）

八月二十四日、松坂屋平安殿の廣間には懸のレースのカアテンが流れるほどの風が入つてをり、二台の扇風器はまはりつめてゐた。正面には井泉水先生の本會に寄せられた句が大書されてゐた。

かつこうの聲は母の遠いお里のおばいさんと

すつかり背くて暮れて山羊の乳しぼる時間

午時會を開き、[illegible]部人會での懇談會の模樣の報告並に將來の[illegible]地[illegible]をした。前記井泉の玉付につぎ、俊二、北湖、海軒の[illegible]の[illegible]を[illegible]、次の祝吟の披露があつた。

ひざかりの水のゆくひかりてゆく　父草

水に　の影の花はこぞりて咲き　木衣樓

背田の　の　の早稻の穗　呵歩

選後、高點句より[illegible]評[illegible]を行つた。善知君十四點であつた。

雷の中の[illegible]來を　故　故はなびらにしてゐる　善知

山の霧が合ひ少女とこんこん[illegible]の消えてゆく空　星兒

いとけなくてうけびのうまき云ふ山にすわり山の秋　六郎

えきのもくげあめふつたあと　冬人

こども海を空を眞向にぬりつぶしてゐるのです　武朗

朝、霧がはれてくるのが故場の柵　健三

街路樹のバス待つ[illegible]はあるサンダルシューズ　秀明

唐黍のたけけふも雨の氣配見せてゐてくれてしまふ　源三郎

ぐんぐんあげてくる汐で青淀ばんばん歸つてくる船で　青史

星空くるりとまわして鐵棒のつめたい秋　俊子

月のない背空に遠草火が一つ私の廻りに團扇の音　芳春

夕空が夕月になるてのひらでうけてゐる　舟洋

今年の並木の青さとなりガソリンのバスが走るよ　あきら

胸を張つて栖む木槿の花咲くを前にす　青河

よく眠れて朝の日があるあさがほ　幸延

紺のかすりの野良着もあやめさく此の頃　千九里

音たてててコップに水がさされます　富士郎

ふるさとはやまみちがよいぞうりにかえる　信全

ときたま注射にくるだけとなり白い道ごの道　すず子

明るい灯のかげで蛾をむく時耳の底まで鳴く虫がある　杏平

海子供帆船ときそひ月は西に　治彦

まつたく青い光へ石の重さで沈む　啓三

雨の音がしてきた都會の雜誌　雄一郎

銀河の下で祭が笛吹いてゐる八ツ[illegible]の葉つば　英夫

蟬、夕日が川にとけこんでゐる　邦彦

船曳いて行く船の青波ゆれて落　健藏

一番星みつけたといふてる[illegible]の遠ゆれてる　陸男

夏ははだかの白シャツの白さを干す　弘雄

松の木からお月さんが出てきて明るくなる黑れんぼ　信夫

寒のたらひに月がそこにも風がふいてゐる　正德

水に動く橋の影がほどけるとぶ　敏之

涼風、豆の葉よ何をささやいてゐるのか　はじめ

すすげばすずしいゆかたの染いろ　蓮子

きりぎりすちよんと鳴いてうちわ動いてゐる　秀夫

山羊の乳重々しく岸の草ひたり流れ　梅宇人

うしろからこゑが月のある夜　好弘

夏も終りちかくて船の上夕月[illegible]の上赤蜻蛉　聖己

山の路大蟬は鳴く鳴く信濃のすみ空　朗南

青田山につつまれて山からくる風が二階　明雄

裸で裸の子を抱いて青田からの夕風　有一

虹、トマト畠のしづくする音で　魚眠洞

議論活潑若者の熱情は明日の層雲の一大動力である事を思はせた。

この東海大會を機に、名古屋を中心に「平野の會」が設立され月例的に句會を催すことになつた。九月は二十八日、堅三ツ藏町の帝國油糧會社で催された。又、濱松、豊橋等に句會が復活する事になつた。其他、名古屋の青年層にも新しい會が出來、啓三氏が幹事として活潑である。

松の會（濱松）

新入星兒君の熱意が、その村の曳馬吟社の盛大と共に、遂に松の會を復活させて、九月十二日、第一回の句會が催された。六郎氏の盡力による。松の人達は層雲としても舊參の人が多く、ひさしぶりでの昔語りになつかしみ、曳馬吟社から參會の若い人達には勉强になつた。例會は大體十日前後、元城町の六郎氏居にて催される。

住めば家らしく雨ふれば雨だれ　千佳
魚紋が雨になつて明けてゐる　俊子
河いつぱいの明るさを潮ましてくるあき　保榮
白いハンカチが眼鏡みがきあげてから朝の青葉　草介
暗い世をふるさとやつぱり青い柿がある井戸がある　舟洋
ここまでとどく風がそこの萩にも次々　吉寅
傷が秋を知つてゐる眞白なガアゼ　星兒
刈り込んだ槇へ月が上つて瓦光つてゐる　冬扇
忌日そのおゆづりの帽子をぬいで香を焚く　天仙果
少女夢のやうな夕顔のはながくれてしまう　香代
魚釣つてゐる日盛り通り紅い花　颯々子
うちの子の齒のはえそめし朝涼にして　泉
稔り田流れてくる風のはなしてゆく　六郎

×

函館に北海道新聞編輯部の平つねを氏が中心で新しく「皆（チャシ）の會」が出來た。岡山縣では津山の鶴の會の他に其隣村に、次良氏の指導で「どんぐりの會」が生れた。赫城子氏が應援してゐる。津山では同人諸氏の熱あがり今では會員數は三十人を越してゐる。

關東俳句大會

十一月三日（月曜　明治節）。東京上野博物館內「應擧館」にて開催します。詳細は十九頁にあります。

投稿規定

俳句　荻原井泉水選
編集部選

- 投稿は誰でも自由
- 一人　一月　一稿
- 句數は一般は五句　會員Bは十句　Aは三十句迄
- 用紙は半紙二ツ切大のもの一枚に五句迄楷書淸記
- 二枚以上は左上カドを綴る
- 句稿の添削を望む方には內規がある照會ありたく

文章　編集部選
- 評論　研究　隨想等

俳句會報
- なるべく會の直後に詠草に會の報告文を添える
- 俳句會報は層雲社に保存しておきます

投稿に私信や用件を同封されても差支えない

締切　毎月十五日

投稿先　層雲社編集部
京都市東山區本町十五丁目

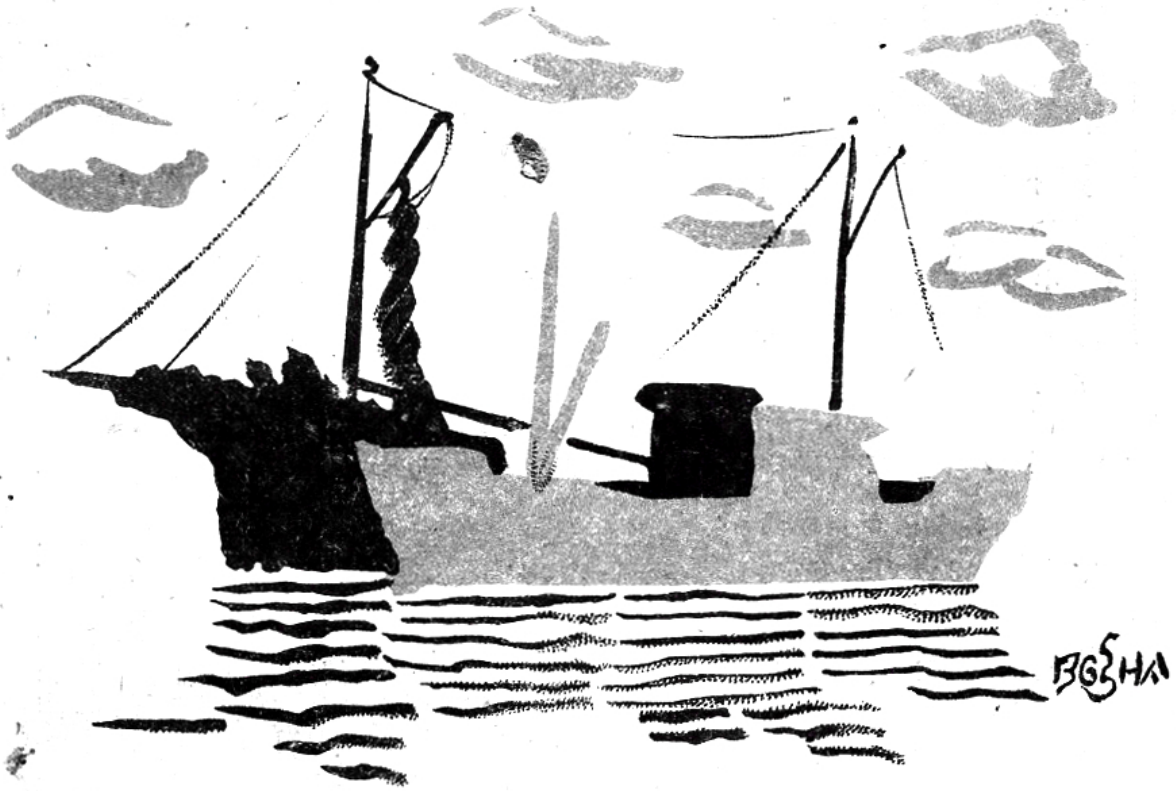
層雲　第四〇八號

昭和廿二年九月廿五日印刷納本
昭和廿二年十月一日發行
定價　一部　十五圓（送五〇錢）

前金で半年分以上お拂込下さい
何月號よりと御指定下さい
御轉居の際は發送部迄御報の事

神奈川縣大船町山之內（龍洞）
主宰　荻原井泉水
編集兼發行人　伊東俊二
印刷人　竹內貫美
京都市柳馬場四條上ル
印刷所　竹內萬寮堂
京都市東山區本町十五丁目
發行所　層雲社
振替京都八一七八番
東京都千代田區淡路町二ノ九
配給元　日本出版配給株式會社

自由律俳句 層雲 第三十五卷 第四號
昭和廿二年十月一日(毎月一回一日)發行・昭和廿二年九月廿五日印刷納本
定價 拾五圓



船具・工具・バツキン

神戸市兵庫區西出町

堀製機船具株式會社

代表者 堀 英之助

楠の會例會 堀英之助方にて

毎月 第二土曜夕六時 第四日曜午後一時より